

はじめて島木先生をお訪ねしたのは大正十三年の秋であった。かつて私は傷つきやすい少年であった。下野の安蘇という地方に生まれ、三嶋山というのもすぐ近くである。それらの山や河の姿が幼い心に食い入っていて、なにか寂しいところを文字に連ねてみることを覚えるようになった。あるとき、先生に、「君は少し感傷的などころがある」といわれて、笑って答えたことがあったが、ひそかに思うところがあった。骨を折って歌を作ろうなどと思ったのはずっと後のことである。それでアララギなどという名称もいつの間にか耳に挟んでいた。たしか大正十一年の八月かに和辻氏の古今集の歌と万葉集の歌についての文章が「思想」に載っていた。その頃から万葉集の歌を多少知るようになった。それから十三年になって、「アララギ」をよく見る気になった。幾日も図書館へ行って古い「アララギ」を読んだり、間もなく出版された『歌道小見』を買って果て夜遅くまで読んだりした。そして私は決心をした。その九月の末に島木先生に一通の手紙を書いて、自分は今物理学科の学生ではあるが、なにとぞ指導していただきたい旨を願った。するとすぐに先生から御返事の葉書をいただいた。それだけでも私はすっかり感動してしまって、その葉書にあったまま発行所へ上ったがまだお出になっていなかった。そしてその翌月お目にかかることができた。それまでは痩せた風貌の、やかましい人のように想像していたが、それはまるで当らなかつた。その日は学校が終ってから発行所へ上がると、座に五六人居って、歌稿を見てられる人が先生とすぐ知れた。先生は私がお家の方へ手紙を上げたことや、先月留守へ来たことを覚えていて言われた。そのときは賞められた歌が少しあった。その夜私はほとんど眠らなかつた。私は島木先生の許へ上がるまで、人と歌の話をしたことは殆どなかつたが、ここまで歩んでくることができたのを何ものにか感謝したい気がする。

それからはたいがい毎月お目にかかつて、歌もみていただいた。歌をみていただきながら、歌などは作らなくてももうこれだけで沢山だと思ふことがよくあった。それは先生の人に深く接していただく感懐であつて、歌を軽んずるところとは違ふようであつた。歌を作ることよりも先に我々の顧みなければならぬことがあるような気がした。私の願うのは傑れた歌を生むような心である。内面的に緊密でない歌は傑れたものではないであらう。

私は歌の話はあまりできなかつたけれども、先生の談笑のうちに水のような滋味を感じていた。それを尊いことに思っている。先生が歌などはあわれなもので

あるといわれたことがある。私は歌などは無用のものであるが、無用の用を知ることはありがたいというような語を吐いた。今でもこれは誤ってはいないと思っている。我々はどうかすると、薄っぺらな理知に頼りすぎたりしがちである。だから純真人人や、その作品に接したりすることができる、ひでりどきに隠を得たようなるおいを感じる。ときに詩を思うところがあれば、それはかたじけないことである。

先生は子のように年少な私をよく導いて下さった。私は無言のうちに何か尊いものを感じていたのを自負している。私が学校を出るときは肉親も及ばぬ世話をしていたのであった。先生は多くの若い人たちを可愛がったに相違ない。しかし私はこれらのことを忘れてはならないのである。親しく接することができた月日は長くはなかったが、私の感銘は長く残るであろう。あのように深い感銘を与えられた人を私は未だかつて知らないのである

(大正十五年九月三日稿)

(本稿は『アララギ』第十九巻、第十号、大正十五年十月、島木赤彦追悼号に「想い出すこと」という題で掲載されたものである。K)